◎資料紹介◎

北海道女性史研究会編『北海道女性史研究』総目次・解題

桑 原 真 人

〈凡 例〉

(1)北海道女性史研究会編『北海道女性史研究』創刊号から終刊号、及び特別号 NO.1、NO.2 の総目次である。
(2)論文などのタイトル及びサブタイトルなどは原則として本文の表記に拠っているが、形式的な統一のために訂正したか所もある。
(3)明白な誤植などは訂正した。
(4)原稿の入力は、李文昕が担当した。

創刊号 (1972 年 7 月 20 日発行)

〝家族〟という集団を考える　今野　良一
兵村時代のお産　国兼　昇
女性史と私　伊藤みえ子
異郷の地にて　生基　恵
女性史研究会の発足によせて　高畑　イク
屯田兵村の妻　高橋三枝子
手紙の背景　尾崎　道子
編集後記

第 2 号 (1972 年 11 月 3 日発行)

女の文化を創る　俵　萌子
蜂須賀の女たち(一)　高橋三枝子
葬むられた歴史　伊藤みえこ
日本炭鉱主婦協議会美唄支部規約
「婦人解放」についての私の視点　三島真知子
生きている記憶 ── 神田スエさんのこと ──
編集後記

第 3 号 (1973 年 3 月 31 日発行)

屯田兵を考える　今野　良一
朝鮮娼婦受難録　佐藤　喜一
屯田入地時代の食料事情・他　波多野　勝
現代の職業における婦人の地位について　榊　以久代
教育の中の女性史(一)　林　恒子
葬むられた歴史(二)　伊藤みえ子
蜂須賀の女たち(二)　高橋三枝子
編集後記

第 4 号 (1973 年 10 月 1 日発行)

炭鉱長屋の子供の歴史　森山軍治郎
蜂須賀の女たち(三) ── 佐々木ちよさん ──　高橋三枝子
ここにも女性の誇りある姿があった　太田　伸子
教育の中の女性史(二) ── 高校日本史にみる女性史 ──　林　恒子
凶作の記録から　今野　良一
八月と女　伊藤みえ子
一娼婦の耐寒力　佐藤　喜一
女の仕事　榊　以久代
私の 80 年のあしあと　国忠スギヱ
追悼　奥山先生　高橋三枝子
編集後記

第5号（1973年12月25日発行）
アメリカのおんな
——開拓時代からの伝承——　松村　宏
葬むられた歴史(二)
——男に権力を持たすな——　伊藤みえ子
生きて生きぬくこと　夕張の母たち(一)
田畑　悦子
おねがいします　関矢マリ子
わが母のこと　中山　勝
ある情死考　佐藤　喜一
離婚二題　今野　良一
離島の老女たち(一)——井田キヨさん——
高橋三枝子
離島の老女(二)——笠井イクさん——
高橋三枝子
私の八十年のあゆみ(二)　国忠スギエ
四号「蜂須賀の女たち」の記事について
高橋三枝子
会員住所・協力会員住所録
編集後記

第6号（1974年5月1日発行）
母キナラブックのこと　杉村　京子
「北海道女性史研究」への私の展望　太田　伸子
北海道史の中の女性(一)　須藤　隆仙
教育の中の女性史(三)
——高校世界史にみる女性——　林　恒子
北のおんなたち　高橋三枝子
側面とつながり　関矢マリ子
旭町内の少年——少年版民衆精神史——
森山軍治郎
葬むられた歴史(三)——名のない女——
伊藤みえ子
「女が太陽でなくなる話」　栃内　邦子
北海道女性史研究会誕生の
いきさつ　金坂　吉晃
離島の老女たち(三)——長谷マツエさん——
高橋三枝子
子育て　和田　君子
看護婦怪死事件　佐藤　喜一
私の八十年のあしあと　国忠スギエ
会員住所録・協力会員住所録
編集後記

第7号（1974年12月25日発行）
母キナラブックのこと　杉村　京子
婦人運動家、重井しげ子覚書　佐藤　喜一
女教師たち(一)　大原　槙子
母の青春記　大田　伸子
母の匂い　橘　映花
動くということ　関矢マリ子
北海道史の中の女性(二)　須藤　隆仙
欣求浮土　伊藤みえ子
感じたままを……高橋三枝子様　朝海さち子
屯田兵村の妻——畑めつえさん——高橋三枝子
会員住所録
協力会員住所録
編集後記

第8号（1975年7月25日発行）
遊里生活を送った主婦たち　佐藤　喜一
北海道史の中の女性(三)　須藤　隆仙
叔母太田コウンテカンのこと　杉村　京子
進むということは　関矢マリ子
私の八十年の歩み(四)　国忠スギエ
深夜業禁止問題と婦人労働者のめざめ
太田　伸子
流れる川のように生きて
——梁川ナミさんのこと——　田畑　悦子
八十六年を生きて　宮崎二三子
屯田兵村の妻——田丸チヨノさん——
高橋三枝子
共同テーマ其の他について　高橋三枝子
会員住所録
協力会員住所録
編集後記

第9号（1976年3月15日発行）
北海道史のなかの女性(四)　須藤　隆仙
叔母コウンテカンのこと　杉村　京子
あこがれ　関矢マリ子
女教師たち(二)　大原　槙子

私の名は醜女　宮崎二三子
座談会「王子争議と私たち」(上)　大田　伸子
瞽女の故さとから
　── 田中レツさんのこと ──　高橋三枝子
協力会員住所録・会員住所録
編集後記

第 10 号 (1976 年 7 月 1 日発行)

人種差別 ── ゆきずりの感慨 ──　松村　宏
中国の女性に接して　林　恒子
女性史序章　おとなの女が学ぶということ
　──「潜在的」差別意識からの解放 ──
　海保　洋子
サッポロ ── 昭和 23 年生まれの私 ──
　栃内　邦子
女の差別 ── その生まれながらにして ──
　小田桐千枝子
差別のなかにも　宮崎二三子
限界とは　関矢マリ子
斗内スエさんのこと　中沢　周子
夕張朝鮮人慰安婦メモ　田畑　悦子
閉ざされた主婦達　坂井　京子
座談会「王子争議と私たち」(下)　太田　伸子
ある証言 ── 実態をえぐりだす斗いを ──
　高橋三枝子
会員住所録
協力会員住所録
編集後記

第 11 号 (1977 年 6 月 10 日発行)

北海道史の中の女性(五)　須藤　隆仙
佐々木ツナさんのこと　中沢　周子
六七歳の青春　駒井　秀子
花に生きる ── 玉井宗影さん ──　宮崎二三子
サッポロ昭和二十三年生まれの私(二)
　栃内　邦子
女教師たちの足跡を追って　大原　槙子
聞き書きの中の歴史　人見　和
〝聞き書き〟文学の一つの完成　内野　悟
「北海道の女たち」を読んで ── 女の手で歴
　史は書き変えられる ──　海保　洋子
記録しつづけて成り立つ自らの歴史
　西嶋　征夫
流刑地の女性 ──「北海道の女たち」を読ん
　で ──　佐藤　喜一
会員住所録
協力会員住所録
あとがき

第 12 号 (1978 年 1 月 25 日発行)

「野の女性史」をめざして　早田リツ子
水津暉さんのこと　浅田　泰子
まだ見ぬ能登を　小田桐千枝子
橋本トキヱのこと　西谷　直子
御礼まで　関矢マリ子
田口コウさんのこと　駒井　秀子
花に生きる(三) ── 古川とみさん ──
　宮崎二三子
北海道史のなかの女性(完)　須藤　隆仙
己から出て己に還る ── 柏谷タキさん ──
　高橋三枝子
あとがき
会員住所録
協力会員名簿

第 13 号 (1978 年 8 月 1 日発行)

南北の塔に眠るウタルに　鷲谷　サト
「視点」をめぐって　早田リツ子
サッポロ昭和二十三年生まれの私
　── ピー玉事件 ──　栃内　邦子
女教師たちの足跡を追って
　── 江口テルさんのこと ──　大原　槙子
志村登志代さんのこと　駒井　秀子
水津暉さんのこと(二) ── そのように生か
　して下さった神 ──　浅田　泰子
花に生きる(四) ── 斉藤いちさん ──
　宮崎二三子
御所びなに見るわが家の歴史　斉藤　節子
私のきき書き考　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第14号（1979年5月10日発行）

「ムラ」と女性史　早田リツ子
封建的な時代の母と姉のお産　田中　初子
花に生きる(五) ── 宇津見安子さん ──　宮崎二三子
井上きみいさんのこと　駒井　秀子
「青春の歴史・幸子の死」を読んで　坂井　京子
音標部落の女たち(一) ── 青柳キチさん ──　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第15号（1980年2月10日発行）

わが家の戦後　森山軍治郎
戦争中の記録と記憶 ── 小学生の日記など ──　林　恒子
太平洋戦争下の婦人労働 ── 王子製紙苫小牧工場に働く三人の場合 ──　岸　伸子
越智晴子さんの被爆体験　谷川美津枝
戦時中の思い出　田中　初子
戦争の悲劇 ── 富岡晴美のこと ──　西谷　直子
戦争 ── 反戦としての共同購入 ──　栃内　邦子
私が戦争を考える三つの章 ── いもだんご・満州・原子爆弾 ──　大原　槇子
上田すみれさんのこと ── 一九四五年樺太を中心に　駒井　秀子
戦中戦後の母や私のこと　坂井　京子
民衆にとっての戦争　早田リツ子
二通の遺書　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第16号　10周年記念特集号（1981年7月20日発行）

「女性史研究を」を振返って　佐藤　喜一
をかもか　関矢マリ子
基底からの眼(家と女)　早田リツ子
上田すみれさんのこと ── 一九四五年樺太を中心に(二) ──　駒井　秀子
女性史ノート NO.1　久世マユミ
北海道史と私 ── 現代の出稼ぎを通して気づくこと ──　岸　伸子
髪結の人びと　谷川美津枝
教育の中の女性史(補遺)　林　恒子
「女が働くこと」をどう語るか ── 高校生に ──　斎藤　節子
庵原松子さんのこと　永上シナヲ
「自立ということ」── 専業主婦の生活実感を通して ──　四ツ柳敦子
花に生きる(六) ── 世良美智子さん ──　宮崎二三子
女教師の足跡を追って ── 司辻シナさんのこと ──　大原　槇子
未決囚の青春 ── 本間きくえさん ──　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第17号（1982年7月30日発行）

北海道私論―ウタリ編によせて　早田リツ子
続　北海道の女たち―ウタリ編によせて　城野口百合子
一九八一・旭川・横浜集会　関矢マリ子
第二回全国女性史研究の集いに参加して　吉田　優子
第二回全国女性史研究の集いに参加して　川村恵智子
「第二回女性史研究会の集い」を振り返って ── その実感と反省 ──　岸　伸子
高度成長とは私たちにとって何なのか　田中　初子
無心こそ得　長田　敦子
「引揚げの母たち」のことなど　四ツ柳敦子
花に生きる(七) ── ロマンフラワ ── 伊藤富甫さん ──　宮崎二三子
髪結の人々(二)　谷川美津江
炭鉱に生きる女たち ── 夕張炭鉱の主婦たちに聞く ──　駒井　秀子
虹別原野六三線一五六 ── 石崎よねさん ──　高橋三枝子

会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第18号(1983年5月31日発行)
特集「教科書問題を考える」
教科書と日本人　田中　彰
高校現場にとって教科書とは何か　林　恒子
「侵略」についての断章　早田リツ子
母親として「教科書問題」に想うこと　川村恵智子
「教科書問題」の真の問題点　飯田　澄子
意志表示 ── 私の場合　駒井　秀子
つんぼ桟敷　関矢マリ子
「教科書レポート'82」を読んで　四ツ柳敦子
「教科書問題」について朴炅和牧師にきく　高橋三枝子
白石遊廓の女たち　谷川美津枝
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第19号(1984年6月16日発行)
特集・書評　戦争と女たち
戦争について　飯田　澄子
「戦争と女たち」を読んで　佐藤　喜一
「戦争と女たち」に添える手紙　五十嵐久弥
「戦争と女たち」を読む　早田リツ子
あの戦争は何だったのか　森山軍治郎
特集・記録　女たちの旅
モスクワの婦人たち ── 私の会ったロシヤ人 ──　高岡　京
南半球の豪州 ── 乳国(ニューシーランド)──　関沢美津恵
「沖縄戦」への旅 ── 住民は守られたか ──　四ツ柳敦子
「韓国で出会った」女たち　高橋三枝子
〝全国女性史研究交流のつどい〟はお互いを鍛えあって前進する　岸　伸子
深川遊廓の女たち　谷川美津枝
御厩園枝さんの戦争体験(聞き書き)　川村恵智子
電話交換手の二十年　泊　ともえ
新しい・古い　関谷マリ子
道内の女性史研究会紹介
名寄女性史の集い
札幌女性史研究会
道南女性史研究会
帯広・十勝女性史研究会コスモスの会
北海道女性史研究会
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第20号(1985年7月10日発行)
特集　現在を生きる視点
なぜ書くのか　早田リツ子
女性史に学ぶこと　飯田　澄子
戦争・国家・女たち ── 現在を生きる視点として ──　四ツ柳敦子
感覚的戦争体験派メモ　大塚美栄子
生き方としての女性史　高橋三枝子
絵本のなかの母親たち　柴村　紀代
報告 ── 町立助産所を守るたたかい　駒井　秀子
母ハルヱの生涯　磯前　リツ
〈特別寄稿〉
北海道女性史と大正期　桑原　真人
経済恐慌と戦争 ── 一九三〇年代と今日の日本経済を比較して ──　小野寺正巳
執筆テーマ・形式より見た「北海道女性史研究」　船津　功
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第21号(1986年6月20日発行)
追悼　関矢マリ子さん
歴程遠く　美土路達雄
野幌部落の写真について ── 関矢マリ子さんからの聞書き ──　関　秀志

のっぽろ原始林の形見の花
——関矢マリ子さんに——　駒井　秀子
関矢マリ子さん　橘　喜代子
孤高に徹し怜悧に生きる　高橋三枝子
関矢マリ子さんと野幌地域史研究
桑原　真人
ナイロビからの報告　深尾　勝子
創立十五周年記念座談会
北海道女性史研究の十五年を語る
佐藤　喜一、今野　良一、高橋三枝子
語らざる真実を伝えること——北海道女性史研究会十五年に贈る——　堅田　精司
もう1つの学校——私のPTA体験から——
四ツ柳敦子
母の足跡　泊　ともえ
私の六十八年　磯前　リツ
書評　高橋三枝子著「大地に刻んだ青春」——北海道を拓いた女たち——　森山軍治郎
指標としての女性史——「大地に刻んだ青春」を読む——　早田リツ子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第22号（1987年8月15日発行）

関矢留作先輩についての補遺　美土路達雄
(その1)駒場社会科学研究会の創立とその展開　西山　武一
(その2)駒場における関矢留作君　近藤　康男
(その3)きゝがき　産労のころの関矢さん　柳沢　宏康
雑誌及び新聞記事・写真の伝達力は実に偉大なものである。　荒井源次郎
民族差別をなくし「アイヌ民族に関する法律」の制定を目指して　城野口百合子
教えこまれた「軍国の母」の自覚　斉藤　節子
人生八十年に思う　磯前　リツ
故・五十嵐久弥のこと　五十嵐君子
誰のせいでもない雨が…「女たちの〈銃後〉」を読んで　四ツ柳敦子
相対化する視線　早田リツ子
交換手の大先達
——武田幸子さん（旭川）——　泊　ともえ
道庁の産婆さん
——酒勾俊子さんのこと——　駒井　秀子
女教師から農家の妻に
——越田美津子さん——　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第23号（1988年6月10日発行）

わが回顧の記　荒井源次郎
尋常小学校教員資格を取得——コタン婦女子の指導に尽された栗山カナ——荒井源次郎
上川最初の定住者鈴木亀蔵の妻——女傑イアンパヌ——　荒井源次郎
走書　炭鉱春秋考　佐々木　武
「率直」に生きるということ　早田リツ子
「大草原のローラ」享受への疑問　柴村　紀代
母親と戦争　斎藤　節子
戦争が変えた人生
——荒井ミツ子さん(旭川)——　磯前　リツ
電話交換手の大先達（二）
——伊藤ふじ子さん——　泊　ともえ
高橋三枝子さんのこと　反怖　陽子
「基底から視る」
——学校現場からみえた戦争——　四ツ柳敦子
助産婦　伊藤サチさんに聞く　駒井　秀子
候補の妻——愛と信念を貫いた久弥氏夫人君子さん——　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第24号（1989年6月20日発行）

ウタリの文化研究に没頭した天才的アイヌの少女　知里幸恵　荒井源次郎
数少ないウタリの歌人とし　生涯伝道活動に尽くしたバチェラー八重子　荒井源次郎
女人を恋う——時実新子「有夫恋」に寄せて——　斎藤　公子

二つの戦後青年像
——林　清三と小笠原善平——　佐藤　喜一
「主婦」の行方　早田リツ子
電話交換手の仲間たち(三)
——小仮聖子さん——　泊　ともえ
「責任」ということ——サハリンに残された
人々について——　四ツ柳敦子
北辺の地に女一人
——中野イト女考——　佐々木　武
選択は己にありて悔ゆるなし
——一ノ関テツさん——　高橋三枝子
特集「天皇制」を考える
経験的天皇観と天皇制　美土路達雄
天皇制の完成　荒井源次郎
教育の恐ろしさ　田中　初子
私たちの課題　大江ミヨ子
天皇の戦争責任は　泊　ともえ
私の中の天皇　磯前　リツ
ご真影　近藤　艶子
軍事教練と女性スポーツについてのス
ケッチ　大塚美栄子
天皇制についての一庶民的考察　駒井　秀子
闇の流れ　早田リツ子
私たちが学習会でとらえた天皇問題
岸　伸子
天皇重体をめぐる北海道の動き
(1988年9月末〜12月末まで)
私の中の天皇　梅内　和子
マスコミにみる［天皇制」　高橋三枝子
あとがき

第25号(1990年8月1日発行)

自由のために生まれいづ　美土路達雄
僕と天皇・天皇と教育　逸見　勝亮
追悼　丸岡秀子さん　斎藤　節子
女たちの〝開基〟一〇〇年　森山軍治郎
長橋——板谷ツマの半生——
北海道での三十五年——　浪江　虔
走書　炭鉱春秋考　佐々木　武
返して!!　お父さんの仕事を、家庭に笑い
声を!!——国労音威子地区家族会　一九
九〇年三月の決意——　岸　伸子
特集　女たちのサハリン(旧樺太)
一枚の樺太地図から　近藤　艶子
戦時下の大泊高女　泊　ともえ
樺太引揚者の記録——古山美代子さん
磯前　リツ
樺太——なおも戦後ぞ——菅野美知子さ
んに聞く　駒井　秀子
残された人々　四ツ柳敦子
国境からの逃避行——村上美津江さん
高橋三枝子
望郷　還らぬ国後に執念を燃やす
——渡辺ミヨさん　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第26号(1991年6月20日発行)

特集一　アジアの女性史
韓国で出会った女たち
——歴史の暗部を——　高橋三枝子
ミャンマーの女性たちの生活と習慣
キム ウェイ ミン
私の見た中国の女性　裴　崢
私の見たフィリピン女性たち　森井　淳吉
タイ女性の社会的地位について　山本　博史
東北タイのピンおばさん　小松　光一
十勝家教連二五周年記念・韓国研修旅行
齋藤　節子
「工女」への旅　早田リツ子
アジアの出稼ぎ女性労働者たち　美土路達雄
特集二　母そして私の自分史
私への一〇〇年　駒井　秀子
母の死に思う　柴村　紀代
母の記憶から　真鍋寿美子
おばあちゃんのちえ袋　成田美喜子
母ハルヱと私　磯前　リツ
寡婦として生きた母　泊　ともえ
母　五十嵐君子
〝老いの看取り〟に思う　四ツ柳敦子
母への鎮魂譜　高橋三枝子

三つの論稿下描き
——ソーニャはわがおっ母——　佐藤　喜一
炭鉱下請「組夫」を支えた〝花の会〟
——北炭夕張新鉱の大災害から閉山へと生活を守って——　岸　伸子
走書　炭鉱春秋考
——女抗夫きよう女語り——　佐々木　武
『北海道女性史研究会』二十年の歩み（抄）　大塚美栄子
『北海道女性史研究』目次一覧（第一号〜第二五号）
会員名簿
協力会員名簿
編集後記

第27号（1992年7月10日発行）

終戦の記　森田　庄作
私の生きた道　大江ミヨ子
農村昔と今　狩野　佚子
走書　炭鉱春秋考　佐々木　武
宮沢賢治の信仰を探って　真鍋寿美子
「唇の釘」に寄せて　早田リツ子
追悼　佐藤喜一先生
在りし日の佐藤先生　成田美喜子
佐藤先生と女性史研究会　高橋三枝子
特集　私と住民運動
日韓両国民衆の間の〝小さなかけ橋〟　小野寺正巳
二重の辛さについて一朝鮮人従軍慰安婦のこと　四ツ柳敦子
住民こそ政治の主人公　高橋　至
女性の活動　その一
男女平等教育をめざして　斎藤　節子
私と労働運動　泊　ともえ
私と高齢期保障の会　礒前　リツ
道路の簡易舗装を　五十嵐きみ子
児童文化運動との関わりの中で　柴村　紀代
私の住民運動十五年　駒井　秀子
女性が変われば社会も変わる　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第28号（1993年9月10日発行）

復員日記　森田　庄作
英霊　成田美喜子
ヤマと従軍慰安婦　佐々木　武
名乗り出た人々——フィリピン人元「従軍慰安婦」　四ツ柳敦子
特集　高齢化社会を考える
よく死ぬためによく生きる　早田リツ子
私と老人問題　川原　洋子
我がまち・老人福祉の展望　真鍋壽美子
北欧の福祉を訪ねて…　斉藤　節子
高齢者の医療と福祉を問う　礒前リツ子
在宅介護の八年　泊　ともえ
介護はプロの手に　高橋三枝子
第五回　女性史研究沖縄大会報告
沖縄を忘れない——第五回全国女性史研究交流の集いに参加して——　駒井　秀子
過去は検証できる　高橋三枝子
慰安所についての証言と慰安所分布年表
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第29号（1994年8月1日発行）

特集「いま家族を考える」
いま、家族を考える　今野　良一
私と国際家族年　高橋いたる
新しい家族へ　早田リツ子
女と「家」　四ツ柳敦子
家族の構図　泊　ともえ
私にとっての「家族」　礒前　リツ
「家族の崩壊」におもう　成田美喜子
変わる時代、変わる女性
——婦人年から家族年まで——　駒井　秀子
児童文学に描かれた〝家族〟　柴村　紀代
「家族」とは　高橋三枝子
市史の内外　佐々木　武
空襲の思い出　森田　庄作
北海道女性史研究創刊の頃　森田　庄作

十勝の女性（戦前）　斉藤　節子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第30号（1995年7月15日発行）

特集「それぞれの戦後」
「寛容」に寄せて　早田リツ子
戦後生まれの戦争観
——ゼロからの視点——　原　雅恵
戦後五十年を経て、いま教育を考える　斎藤　明美
戦争を挟んであの頃を偲ぶ　真鍋寿美子
教員としての再出発　礒前　リツ
英語と共に歩んだ私の戦後　泊　ともえ
戦後五十年たったけれど　成田美喜子
半世紀を支えてくれた友達　近藤　艶子
戦後五〇年に思う　高橋いたる
新居正子さんの戦後
——戦禍の東京をのがれて——　高橋三枝子
動乱の韓国にいきて——吉田イワさん　高橋三枝子
「赤紙」が来た　森田　庄作
市史のうちそと　パートII——市史を通して今日的問題を——　佐々木　武
花々の記録　丹羽　淳子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第31号（1996年9月1日発行）

二十五周年記念——特集「昭和を考える」——
「違う」けれど「同じ」　早田リツ子
時代の激しいうねりのなかで——「昭和」の文学を手がかりに——　齋藤　明美
子供の歌から聞こえる昭和（サトウハチローの詩との出会いを通して）　原　雅恵
私と昭和——模索の時代——　渡辺喜美子
私の生きた時代と経済の流れ　谷川　敬子
子供の遊び（玩具など）　礒前　リツ
映画に見る昭和　泊　ともえ
母と昭和　成田美喜子
世界女性会議——NGOフォーラムに参加して——　斎藤　節子
池袋母子餓死日記覚書　真鍋寿美子
わたし達の日本語に《言葉教育》を　近藤　艶子
私の昭和　田中　初子
福祉に賭けた半世紀
——河部ツヤさんの昭和——　高橋三枝子
破壊活動防止法とは　高橋いつる
市史のウチソト　パートIII——市史に見る自由民権　その栄光と挫折　佐々木　武
兵の日の思い出　森田　庄作
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第32号（1997年8月1日発行）

特集「いま　地域を考える」
地球はぼくらが生きる場所　森山軍治郎
地域活動と私　高橋　至
井戸端会議的地域論　高橋三枝子
花の季節に想うこと　早田リツ子
赤いりんごと地域の意志　原　雅恵
在宅介護を支える地域の人達　渡辺喜美子
地域の中での小さな体験を通して　谷川　敬子
福祉村に住んで　礒前　リツ
葬儀に見る時代と地域性　泊　ともえ
昨今教育会雑感　成田美喜子
十勝女性の活動　その二　齋藤　節子
四都市私観
——北見 旭川 札幌 函館——　丹羽　淳子
旭川を離れて　藤崎　繁子
北の大地に抱かれて
——私の「ふるさと」考　齋藤　明美
地域に支えられて、くすり屋一代——鶴羽久子さんの軌跡を追う——　高橋三枝子
今、古代ロマンがおもしろい——『アリューシャン黙示録』を読む——　柴村　紀代
韓国をゆく——わが心の安重根——　佐々木　武

続・兵の日の思い出　森田　庄作
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第33号（1998年9月20日発行）

特集「次世代を育てる」
女性は何を学ぶか　早田　リツ
「女性に生まれて…」――いま、求められているもの――　齋藤　明美
亀のアキレスの強靱さを　原　雅恵
子供を巡る負の構造　北村小百合
自由化と個性化を求めて　八重樫のり子
七人の受験生と近所のおばさん　藤崎　繁子
今、大人たちがするべき事とは　白井　志穂
フラワーガーデン　丹羽　淳子
女優の引き出し　渡辺喜美子
みんなに支えられて五十年　齋藤　節子
障害を持った孫のために　泊　ともえ
受け継がすべき一物もなし　磯前　リツ
本もの作りに生きがい――原田芳子さんの半生――　高橋三枝子
母性について――北海道の女たちから――　高橋三枝子
韓国を行く――柳寛順梅鳳山のあかい空　佐々木　武
続　兵の日の思い出　森田　庄作
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第34号（1999年7月31日発行）

特集「二十世紀を生きる」
女たちの来し方行く末　早田リツ子
「時代の流れと共に」――私的女性論――　齋藤　明美
二十世紀の台所から　原　雅恵
この時代を共に生きて　白井　志穂
私の結婚　原田　芳子
「個」としての自分を生きるために　八重樫のり子
三笠市の大型米農家として歩む――沢田和子さんの半生――　大塚美栄子
欲望増殖装置としての百年　北村小百合
一五センチの壁の内と外と　丹羽　淳子
私の戦争雑感　藤崎　繁子
ナンジ女なるもの　齋藤　弘道
二十世紀を思う　泊　ともえ
母の平穏を奪ったのはだれだ　磯前　リツ
動乱の一世紀を生きる――浅岡武子さんの生涯――　高橋三枝子
「二十世紀」あ・ら・か・る・と　高橋　雄三
松平農場解放秘録　森田　庄作
追悼・金坂吉晃氏　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第35号（2000年8月1日発行）

特集「二十一世紀に伝えたいこと」
春の贈り物　早田リツ子
「伝える」ことの難しさと楽しさと　原　雅恵
専業主婦とは何か　齋藤　明美
未来へつなげていくために――子供劇場の運動を通して――　白井　志穂
美しい自然と人を　渡辺喜美子
エンデヴァーの軌跡――毛利衛さんへのオマージュ――　北村小百合
戦後、食品作りを生業として――私の結婚、その後――　原田　芳子
社会科離れと歴史認識　藤崎　繁子
手紙の時代　八重樫のり子
戦争のない二十一世紀を　磯前　リツ
弱者に光を　泊　ともえ
二十一世紀にむかっての独り言　丹羽　淳子
平和を　高橋三枝子
二十世紀を生きる　森田　庄作
むかし、こんな事もありました　高橋　雄三
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第36号（2001年7月25日発行）

三十周年記念特集「原点に立つ ── それぞれの」
もう一度手をつなぐ　早田リツ子
今の自分を立脚点として　原　雅恵
戻ってきた時間　藤崎　繁子
父母に捧げるレクイエム　柴村　紀代
自然の中から学んだ大切なこと
── 自然体験教育の重要性 ── 白井　志穂
心の原点に立つ　丹羽　淳子
女らしさの起源　八重樫のり子
農村に関する私の思い　大山千鶴子
血脈　高橋三枝子
私の商い・豆腐屋のおばさん　原田　芳子
「婦人科病棟にて」
── 女性である私の原点 ──　齋藤　明美
独りを生きる　礒前　リツ
不治の病を克服して　泊　ともえ
父の思い出　母の記憶　谷口　敦子
母の三行半と聖書　渡辺喜美子
〝陸の孤島〟から ── 友へ ──　高橋　雄三
北海道女性史研究会三十年の歩み
大塚美栄子
続・兵の日の思い出　森田　庄作
南米世界遺産探訪　齋藤　節子
昔味のりんご作り── 水澤明美さん ──
高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第37号（2002年7月10日発行）

特集　いま　私が思うこと
北海道女性史研究会三十周年記念講演
── この三十年と女性史　森山軍治郎
その流れにたち向かう ── あやまちをくり返さないために ──　白井　志穂
手紙　早田リツ子
回復に向けた生産（三つの観点から）
原　雅恵
平和を渇望する　藤崎　繁子
我が黄昏の時　齋藤　明美
尊厳死と終末期医療の体験から　原田　芳子
生涯の友　谷口　敦子
ショパンへの旅　渡辺喜美子
友の会の一人として　丹羽　敦子
ニュースの狭間で思うこと　大山千鶴子
「有事法制関連三法案」について　泊　ともえ
私の終の栖　礒前　リツ
音更町のふれあい住宅　齋藤　節子
眠られぬ夜の老いの繰言　高橋　雄三
支えられて三十年
── 忘れえぬ人びと ──　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

第38号（2003年7月15日発行）

特集　未来社会を問う
未来は拓かれるか　早田リツ子
たった一人の人として　原　雅恵
今、私がしなければいけないこと　藤崎　繁子
新しい命の誕生を願って　原田　芳子
少子化の今を考える ── 未婚　非婚を中心として ──　齋藤　明美
未来に戦争はいらない　白井　志穂
私たちの老後の行方　大山千鶴子
私の舅自慢 ── ありがとうのこころをこめて ──　谷口　敦子
食卓からの私信　丹羽　淳子
米寿をむかえた今も詩人
── 新井田キヨノさん ──　大塚美栄子
米に賄ける
── 竹田栄子さんに聞く ──　渡辺喜美子
福祉の後退　泊　ともえ
住めば都に　礒前　リツ
いま一度振り返ってみよう　高橋三枝子
少子化時代の戦争社会をどう考える
田上　唯勝
光景ふたつ　高橋　雄三
支えられて三十年 ── 忘れえぬ人びと ──
高橋三枝子
会員名簿

協力会員名簿
あとがき

終刊号（2004年6月15日発行）

特集　豊かさと家庭の役割
丘の高みから　早田リツ子
『もう独りの女』とは誰か　原　雅恵
「矛盾」の光景　齋藤　明美
庭と私　渡辺喜美子
心ゆたかに　長池　泰子
母からの結婚祝い　谷口　敦子
いまは懐かしい思い出に　磯前　リツ
詩二題　朝・風　丹羽　淳子
テレビ放送から食を思う　大山千鶴子
豊かさとは　泊　ともえ
井の頭のほとり　白井　小月
二〇〇四年二月某日　東京にて　藤崎　繁子
ほんとうの豊かさとは　白井　志穂
石狩の風に乗って　板倉　明子
『わだつみの声』に聞く　高橋　雄三
飽食の中での矛盾　原田　芳子
文学者の妻として
――佐藤　行さんの半生――　高橋三枝子
会員名簿
協力会員名簿
あとがき

特集号　NO.1（2008年5月発行）

特集　このままでいいのか　いまの日本
――戦争はなし崩しにはじまり拡大していく
（故小田実氏の言葉）
沖縄からのてがみ　我が身つで見ちど
知念はつみ
私の戦争体験　古林　茂美
戦争とは人の生涯を狂わせる凶器である
高橋三枝子
戦争は人間を狂気にする　高橋三枝子
僕らだけの日本国憲法（九条）ではない
森山軍治郎
戦没者遺族について　江崎　寿美
『銃口』に思いをはせながら――東京で日
の丸・君が代の強制と戦う――原田　収
カタクリの会に集う女性たち　大塚美栄子
賢治の作品から思うこと　大山千鶴子
糖度計　丹羽　淳子
権利としての社会保障が輝く時代を
高田　哲
二十代からの告発
――ガムにならない――　高橋　季里
中小業者と憲法　橋場　輝光
ブランクを埋める勇気　谷口　敦子
母たちの生きてきた道　川島　陶子
昭和十九年春卒業の女学生時代　原田　芳子
孫たちに信頼されるように　鈴木　サト
『罪深い眺め』を眺めながら　早田リツ子
日本はこのまま米国依存で良いのか
小野　真実
北海道～茨城、農業村からのオムニバス
鈴木　孝夫
あとがき　高橋三枝子

特集号　NO.2（2009年2月発行）

主題＝家族、生と死、尊厳死――九条の旗
破るるとも竿放さず
一冊の小さな本　高橋　雄三
『原爆と戦争展』のなかでつかんだこと
野原　郁美
弾痕　大城　静江
生と死の困難に向き合う　早田リツ子
追記　特集号NO.1の意味すること
早田リツ子
崇高な理想を掲げて新時代へ　小野　真美
百年前の韓国併合と祖父　小野　真美
逆縁に耐えて半世紀――天国の邦彦へ
磯前　リツ
生きる勇気と自信を貰った旅　高橋三枝子
時間の窓から見えるもの　原　雅恵
戦死した弟と私　北城　ヨシ
死者の声に耳を傾けよう――玄基榮の
「順伊おばさん」を読む――　金　京　媛
医療危機の時代に思う　渡辺　一晶
人の「死」におもう　森山　幸代

尊厳死協会に入っていた祖母のこと　丹羽　淳子
生きているということ　川島　陶子
私の中の「ヒロシマ」　高橋　季里
再び済州島を訪ねて　森山軍治郎
私にも「あした」があった　高橋三枝子
あとがき　高橋三枝子

〈解題〉

北海道女性史研究会と『北海道女性史研究』について

桑原真人

(1) 北海道女性史研究会の設立

北海道女性史研究会の機関誌『北海道女性史研究』は、1972年（昭和47）7月20日に発行された。筆者の所蔵する創刊号には、創刊号と「創刊号　第2版」の2種類があり、この雑誌の発刊が当時大きな反響を呼んだであろうことが推察される（創刊号の初版発行部数は300部、第2版は300部)。ちなみに刊行母体となる北海道女性史研究会設立の中心となったのは、旭川市在住の女性史研究者である高橋三枝子とその友人たちであった。当時、高橋は42歳になったばかりだったが、もともとは文学に関心があり、さらに婦人運動に足を踏み入れた時、宗谷地方の開拓農家の女性に出会ったことから、「開拓農家の女の人を追って見たいという思いがあった」。高橋は後になって、第21号（1986年6月発行)に掲載された女性史研究会創立15周年記念座談会の席でこのように回想している。

創刊号の「編集後記」には、設立時の研究会事務所が置かれていた「古書の店　尚古堂」（旭川市5条12丁目、)の経営者金坂吉晃によって、同会の設立経過が次のように記されている。なお、会の事務所が尚古堂に置かれていたのは第3号（1973年3月発行）までで、第4号（1973年10月発行）から高橋の自宅に移されている。

女性の側から北海道の女性の歩ゆんできた歴史、いわゆる女性史を掘り起そうという、誰しも心あるものなら考えたことが、やっといま旭川で陽の目をみることになり、数人の者が集った。

長い冬の間に汚れた根雪がとけて、桜草の黄緑の芽がやわらかい陽ざしに沢山ひかっていた三月下旬のある日のことであった。

四月十日、三笠市から空知地方史研究協議会々長の供野先生をお招きし、旭川市史編さん室の金野局長にも御願いし御出席を頂いて、尾崎さんの生花教室で第一回の女性史研究会の集まりがあった。

会のリーダーとして高橋三枝子さんを選び進行係を事務局の金坂が担当したが、何分にも不馴れの故に、雑談会の様になってしまった。併し供野、金野の両先生の御話には皆それぞれ感銘を深くした。

高橋、尾崎の両氏は早速活動を開始した。その成果はこの第一号研究誌に掲載されたとおりで、従来の決った様なパターンの発表ではなくて、各自の個性を生かしたエッセイとなった。

事務局の金坂は、後に「北海道女性史研究会誕生のいきさつ」を同誌第6号（1974年5月発行）に執筆しているが、これによれば、4月10日以前に次のようなことがあったという。尚古堂が滝川市から旭川市に店舗を移し、開店して3か月ばかり過ぎた1972年3月上旬のある日のことだった。

三人の中年の御婦人が連れ立って来店され、開拓資料のようなものを探されたようだったが、生憎く探されるものが見当たらず、ついついストーブの囲りに腰掛けてもらって雑談となった。

北海道の開拓を本当に支えてきたのは女性たちなんだから、その女性たちの本当の姿を掘り起こす、所謂女性史研究の会がもうあるべきです。皆さんで結成されたらどうですか。とかなり熱っぽく力説した。

それから二三日経ってから、高橋三枝子さん、尾崎道子さん、それにもう一人N子さんという方々が来られ、すでに道新の婦人記者の石川さんも一緒に来られ、女性史研究会を記事にするという手配。すっかり驚いた。

「女性史研究会を記事にする」というのは、同年4月18日の付け『北海道新聞』の全道版に、このことが掲載されたらしいことを指している(但し、『北海道新聞』の縮刷版では確認できなかった)。また、研究会の名前の由来についても、金坂は次のように記している。

名前は「北海道女性史研究会」に決定した。

過去北海道で、こういう会がなされ活動したということを聞いたことがないから、旭川でのこの女性史研究会は、道内で最初の企でしょうと、私はやや気負った発言をした。

「私たちも実は前々からその必要を感じていたんですが、なかなかチャンスがなかったんですョ」と仰言りながらも、皆さんそれぞれやる気十分の様子だった。

旭川は、やはり女性史研究会の育つ下地はあるナと感じたことだった。

ここには、旭川で旗揚げした女性史研究会の名称に、「旭川」ではなく、あえて「北海道」と命名した高橋らの自負心が感じられる。「その後も数回の集まり」を持ちながら、話題は「第一回の総会」の開催に移っていった。1972年4月10日、北海道女性史研究会の記念すべき第1回研究会が開かれ、その際に「会のリーダー」として高橋三枝子が選ばれたのである。研究会の会場となった「尾崎さんの生花教室」とは、当時、旭川市常盤通り1丁目の道北経済センタービルの和室を会場に尾崎道子が主宰していた「池坊木曜教室」のことである。尾崎は当時旭川商工会議所の総務課主事でもあり(1973年3月退職)、設立当時の北海道女性史研究会を高橋と共に支える存在だった。

このようにして、高橋三枝子と尾崎道子らを中心に、事務局には男性の古書店主金坂吉晃が加わるという体制で北海道女性史研究会の活動は開始された。組織ができれば当然規約が必要となる。同年11月3日発行の『北海道女性史研究』第2号には、「北海道女性史研究会規約」が掲載されている。

北海道女性史研究会規約

第1条　名称　本会は北海道女性史研究会と称す。

第2条　目的　本会は北海道内の総ゆる分野に於ける女性史の研究を目的とする。

第3条　事業　本会は左の事業を行う。

(1) 研究会、講習会の開催

(2) 研究誌の発行（年2回以上）

(3) その他

第4条　会員　本会はその目的に賛同し、会費を納入したものをもって会員とする。

第5条　役員　本会には次の役員を置く。

(1) 会長　1名

(2) 副会長　1名

(3) 幹事　若干名

(4) 監査　1名

第6条　顧問　本会に顧問を置く。

第7条　役員の選出　役員は会員の中から総会において選出する。

第8条　役員の任期　役員の任期は2年とする。但し再任はさまたげない。

第9条　経費　本会の経費は会費及び寄付金によってまかなう。

第10条　総会　年1回総会を開催する。

第11条　役員会　役員会は必要に応じて会長が招集する。

第12条　事務局　本会の事務局は当分の間尚古堂におく。

附則　①　この規約は昭和47年8月1日より実施す

②　本会の年会費は1年1200円とする

③　本会に必要な事項は別に定める

これを契機として女性史研究会の活動は次第に本格化していったが、会を率いる高橋の存在は、女性史研究という分野が新鮮だったこともあって、一躍注目を浴びるようになった。1973年12月4日の『朝日新聞』北海道版の夕刊に「北のおんな」というコラムがあり、「女性史研究」者としての高橋が次のように紹介されている。

「汗と血でつづられた女性たちの歴史こそ、北海道をつくりあげた歴史といえます。それをぜひ、おんなの手で書きたいんです」。昨春、旭川市で発足した北海道女性史研究会を主宰する高橋さん。カメラ、録音機をかついで屯田や農村を回り、すでに二十五人のおばあちゃんから取材した。

「年寄りの記憶をたぐるので、ばく然としているし、なにしろ生きている人の歴史でしょ、しんどいですね」。変化の激しい時代、今でなければ残せない記録だけに、高橋さんの心はせく。

「年寄りは振り返ることしかないんです。だから洗いざらい話したい、そんな気持ちなんですね。それに、自分たちが北海道を開拓したんだ、という誇り、自負心が強い」。厳しい自然に立ち向かい、ただ黙々と生き、また埋もれていっ女たちに接し、「大地に根をおろしたおばあちゃん」を感じるという。

会誌発行も四号になる。取材、編集、発送、すべて一人仕事だ。発足当時五人だった会員は、今では全道に広がって十五人。山形、秋田、遠く九州や沖縄の女性からも会誌を求める手紙が舞い込んでいる。病気がちだった体も、この仕事を手がけてからすっかり健康になった。

ここには、「聞き書き」という方法論を駆使して調査を始めたばかりの、しかも女性史研究会を率いる高橋の姿が生き生きと紹介されている。また、1975年9月28日発行の『赤旗』の「楽我記」蘭にも、会誌の内容が「〝沈黙と忍耐〟」と題して次のように紹介されている。

○・・・『北海道女性史研究』という冊子を北海道女性史研究会（旭川市東光十五条三丁目）が出している。第八号まで出ている。「北海道の自然と風土にたちむかい、急激な近代への傾斜のなかで、女性たちは黙々として生き無言のうちにうもれてゆきました。私たちはその無言の女性たちの労苦の軌跡をたどり、掘りおこすことを願って・・・」というのがこの会を発足させた趣旨である。

○・・・第八号には「遊里生活を送った主婦たち」（旭川図書館長・佐藤喜一）、「北海道史の中の女性」（南北海道史研究会主宰・須藤隆仙）などの巻頭文のあとに、「私の八十年の歩み」「流れる川のように生きて」「八十六年を生きて」など、北海道の庶民の一人として苦しい生活を生き抜いてきた女性たちの、貴重な記録が残っている。

○・・・「屯田兵の妻」としての自分の歩みを語る田丸チヨノさんは九十四歳。香川県に生まれたチヨノさんは数え年十三歳で、両親とともに入植する。長途の船旅、小樽上陸から入植地の石狩川畔まで、「まるで荷物のように扱われた」。それ以後の八十余年を、途中でなんども絶句しながら語る足跡の大半は、文字通り自らをむなしうして耐える以外に過ごしようのない時間であった。「倖せでしたか」という聞き手の問いに、「唇をふるわせて・・・気色ばむ」チヨノさんの姿が、どんな言葉よりも雄弁に風雪の年月を浮きあがらせる。

○・・・北海道の、いや日本女性の苦しみで、この冊子は充ち満ちている。

『赤旗』コラム欄の筆者による「北海道の、いや日本女性の苦しみで、この冊子は充ち満ちている」といったとらえ方は、高橋の意図した方向とは異なっていたようにも思えるが、この時期の会誌の内容がそのような方向に傾斜していたことも事実だった。

その後、北海道女性史研究会は設立してから10年、15年、20年、30年と順調に活動を重ねていくのであるが、その点については、「創立十五周年記念座談会　北海道女性史研究の十五年を語る」(『北海道女性史研究』第21号、1986年6月発行)、大塚美栄子「『北海道女性史研究会』二十年のあゆみ(抄)」(『北海道女性史研究』第26号、1991年6月発行)、同「北海道女性史研究会三〇年の歩み」(『北海道女性史研究』第36号、2001年7月発行)などを参照して頂きたい。

なお、1981年8月9日～10日までの2日間、北海道女性史研究会の主催により「第2回全国女性史研究のつどい」が旭川市のトーヨーホテルを会場に開かれたことは、同会の存在が一躍全国的にクローズアップされたことを示す象徴的な出来事だったといえよう。

(2) 『北海道女性史研究』の創刊前後

前述したように、研究会の機関誌となる『北海道女性史研究』の創刊号は1972年7月20日に発行されているが、同誌の創刊事情に関しても金坂は次のように回想している。

> 最初研究誌は、ガリ版刷りかなんかの片々たるもののように思はれていたが、どうせ発行するなら、少しちゃんとしたものを発行しようということで、タイプオフながら研究誌らしい体裁をもち、幹事のいいものを、という要望から事務局一任となった。
>
> 創刊宣言などどいう堅苦しいものより、より親しみやすくという希望から尾崎さんに無理を云って「母たちの夜明け」というすばらしいものを掲載することが出来た。これはずっと続けることにした。
>
> 会費の負担だけでは研究誌はとうてい発行できないところから、広告を頂き、協力してもらって発行しよう―財源確保は広告で―というこの方式でやれば、三〇〇〇部の創刊号は可能だという事務局の判断で、深川のフタバ印刷さんと交渉し、集った原稿を持ちこんで頼みこんだ。
>
> 創刊号三〇〇〇部(足りなくなってすぐ増刷三〇〇部)の包みをほどくと、インクの香りが一杯になり、うすいブルーの表紙に北海道女性史研究、創刊号、埴輪の子を背負った母親の少し口をあけて、何か子守唄でも唄っているのを表紙絵とした、一寸の見てくれはマアマアの出来上がりで、ともあれホッとしたことだった。(七月二十日発行)
>
> (前掲、金坂吉晃「北海道女性史研究会誕生のいきさつ」)

この中で、金坂は創刊号の発行部数を3000部としているが、これはやや過大な数字であって、300部の誤植であろう。また、金坂が言及する「創刊宣言」とは、『北海道女性史研究』創刊号の表紙裏に掲載された「母たちの夜明け」と題する文章である。以下に全文を紹介してみよう。

> 母たちの夜明け
>
> 北海道の自然と風土にたちむかい、急激な近代への傾斜のなかで、女性たちは黙々として生き無言のうちにうもれてゆきました。
>
> 私たちはその無言の女性たちの労苦の軌跡をたどり、掘りおこすことを願って北海道女性史研究会をつくりました。
>
> 汗と血で綴られた女性たちの歴史こそ、北海道を創りあげた母の歴史であると言えます。私たちの力はあまりにも無力ですが、力の限り続けてゆきたいと思います。

ここには、高橋らが女性史研究会を立ち上げた意図が明確に記されており、いわば北海道近代史における女性史の確立宣言とでも呼ぶべきものだった。この「創刊宣言」について、筆者は代表の高橋が起草したものとばかり考えていたが、先の金坂の指摘が正しいとすれば、むしろ尾崎道子の方が深い関わりを持っていたようである。この「創刊宣言」は、その後、終刊号まで毎号の表紙裏を飾ることとなる。

金坂が会誌の編集に協力していたのは第3号までで、第4号からは、印刷所も深川市のフタ

バ印刷から旭川市の谷川印刷㈱に変更され、名実共に北海道女性史研究会は自立した路線を歩んでゆくこととなる。そして、1981年7月発行の第16号は「10周年記念特集号」として刊行されている。

この『北海道女性史研究』という雑誌の傾向と特徴については、例えば第20号(1985年7月発行)に船津　功氏(札幌学院大学人文学部)による「執筆テーマ・形式より見た『北海道女性史研究』」という興味深い論文が掲載され、創刊号から第19号までの同誌に寄稿した執筆者とそのテーマについて詳細な分析を加えている。そして、結論として「『北海道女性史研究』の特長をあえて言えば、聞き書き、自伝、家族の歴史等にみられるように、女性一人一人の日常生活を女性自身が記録していこうとするところにあり、体験的・主観的な側面が強いのではないかと思われる。しかし、それだけに一人一人の普通の女性の歴史を女性として、生活者として、同時代人として共感をもって、丹念に記録し、考えることに成功し、多くの女性の多様な生き方・歴史を明らかにするという成果を挙げているといえる」と指摘している。

船津氏によるこのような誌面の分析方法は、その後前掲の大塚美栄子「北海道女性史研究三〇年の歩み」にも引き継がれており、この論文では第20号から第35号までについての「執筆テーマ・形式の分類」による検討が行われている。また、第26号(1991年6月発行)には、創刊号から第25号までの「目次一覧」が掲載されていることを付記しておく。

しかし、『北海道女性史研究』は高橋の健康上の理由から、2004年6月発行の第39号をもって突然終刊となった。その後、2008年5月と2009年2月、特集号NO.1とNO.2がそれぞれ発行されている。が、今後の予定については、NO.2の「あとがき」にも特に言及はされていない。